



佐屋利遺跡



淀水垂大下津町遺跡



芝山古墳群

第152回

埋蔵文化財セミナー

京都府内の発掘成果速報

報告 「京丹後市 佐屋利遺跡の発掘調査」

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 森島康雄

報告 「京都市 淀水垂大下津町遺跡の発掘調査」

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 松永修平氏

報告 「城陽市 芝山古墳群の発掘調査」

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 菅 博絵

第152回埋蔵文化財セミナー

京都府内の発掘成果速報

日 程

14時00分 開会あいさつ
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
常務理事・事務局長 阿部篤士

日程説明
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課課長補佐 肥後弘幸

14時10分 報 告 1
「京丹後市佐屋利遺跡の発掘調査」
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課調査第1係長 森島康雄

14時50分 報 告 2
「京都市淀水垂大下津町遺跡の発掘調査」
(公財)京都市埋蔵文化財研究所
調査課調査研究技師 松永修平氏

15時30分 休 憩

15時40分 報 告 3
「城陽市芝山古墳群の発掘調査」
(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課主任 菅 博絵

16時20分 閉 会

主 催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
会 場 永守重信市民会館(向日市民会館)

京丹後市^{さ や り}佐屋利遺跡の発掘調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
森島 康雄

1. はじめに

佐屋利遺跡は京丹後市峰山町^{あらやま}荒山に所在する遺跡です(第1図)。国道312号道路新設改良事業に先立って令和3年度から発掘調査を行っています。令和4年度の調査では、丹後地域で初めての^{きよかん}中世居館跡が見つかりました。

2. 遺跡の立地

佐屋利遺跡は丹後半島を貫流する竹野川右岸の微高地上に立地し、遺跡からは竹野川流域に広がる中郡盆地を展望することができます。遺跡の基盤層は、丹後半島を構成する花崗岩の山塊が崩れて再堆積した層です。土層断面の観察によれば、少なくとも3度の土砂流が堆積した後、上層に^{あいら}始良火山灰層(AT・約3万年前)が堆積しています。

3. 居館の遺構

居館の遺構は、南を自然流路N R4009、東を溝S D4002、西を溝S D4008に画される東西約50mの範囲に広がります(写真1・第2図)。

南の自然流路は遺跡の東側を流れる谷川が増水した際に自然堤防を越えて^{あふ}溢れた水が西に向かって流れる流路です。居館の建物が建つ平坦面からの深さは、最も深いところで2mを越えますが、普段は底をわずかに水が流れている程度であったと考えられます。

東西の溝は深さ30~50cmで残存しており、基盤層から浸み出す地下水が流れていたと考えられます。西側の溝S D4008の中には花崗岩の石材を組んだ^{みずだめ}水溜施設(写真3右)が設けられています。

居館の中央部には、南に開く「コ」字状の溝がいくつか掘られていて、溝に囲まれた範囲にピットが集中しています。これらは、建物の柱穴と建物内に水が流れ込まないように掘られた排水溝と考えられます。「コ」字状の溝の規模と配置から、東西10m、南北6m程度の小規模な建物が、同時に数棟建てられていたことが想定されます。個別の建物の復元が困難なほど柱穴が密集しているのは、建物が何度も建て替えられたことを示しています。

これらの柱穴の中には、^{さし}緡に通した40枚の銭を埋めたもの(写真2)や土師器皿と短刀を埋めた

ものなどがあり、建物の柱を抜いた後には祭祀さいしが行われたことがわかります。

建物群の南東側では井戸が2基見つかりました。1基は円形の石組井戸 S E 4006 (写真3左)です。井戸の掘形は直径約2.7m、開口部は径約1mで、深さは約60cm残っていました。もう1基は方形の木組井戸 S E 4005です。木組みの大きさは1辺70cm四方程度ですが、自然流路 N R 4009の底に井戸の底部付近がわずかに残っているのみでした。

井戸の上部が自然流路 N R 4009によって削られていることから、居館が機能していた時には、居館の建物が建つ平坦面はもう少し南に広がっていたと考えられます。

4. 出土遺物

平安時代後期から鎌倉時代の土師器・黒色土器・輸入陶磁器などが大量に出土しています。丹後型黒色土器こくしよくどきと呼ばれる回転台の上で成形され、燻いぶし焼きすることで内面に炭素を吸着させた椀や手づくねの土師器皿など、畿内の影響を受けて地元で作られたものに加えて、中国製の白磁(写真4)・青磁、九州産の滑石製石鍋かつせき、中国からの渡来銭などの広域に流通する遺物が出土しています。このほか、笹塔婆ささとうばや木簡もっかん(写真5)などの文字資料も出土しています。

5. 居館遺構の類例

佐屋利遺跡で見つかった居館遺構は、丹後では初めての事例ですが、四方を堀や溝で囲んだ方形居館は、白河法皇による院政が始まった平安時代末期(11世紀末)ごろから全国各地に出現します。

山城では久世郡久御山町の佐山遺跡さやまや長岡京市の下海印寺遺跡しもかいいんじなどで巨大な堀に囲まれた居館が見つかっています。

佐山遺跡は、木津川と巨椋池おぐらいけに挟まれた低地に立地する遺跡で、幅8m前後の大規模な堀に区画された1町四方を占めると推定される方形居館が見つかっています(第3図1)。居館内部には建物群と井戸や屋敷墓があります。堀の南辺には船着場が設けられていて、堀は水路としても利用されたと推定されます。この居館の成立は平安時代末期(11世紀末)で、鎌倉時代中期(13世紀後半)まで存続します。

下海印寺遺跡は、小畑川の左岸段丘上に立地する遺跡で、幅4～5m、深さ2mほどの堀で囲まれた半町四方の方形居館が見つかっています。堀の西辺中央に設けられた土橋を渡ったところに門が設けられ、門から堀に沿って柵が巡らされ、堀の内部には建物が数棟建てられています。居館の成立は平安時代末期(11世紀末)で、鎌倉時代初期(12世紀末)まで100年余り存続します。

丹波では、大内城跡(福知山市大内平城)、上ヶ市遺跡うわがいち(福知山市川北)で居館が見つかっています。大内城跡は、由良川水系の土師川と竹田川の合流点東側を西に延びる幅の広い尾根上に立地す

る遺跡で、1町四方と推定される敷地の過半が発掘調査されて、5～6棟の掘立柱建物が建てられた居館が見つかりました(第3図2)。居館は平安時代末期(11世紀末)に成立し、鎌倉時代(13世紀)まで続きます。

上ヶ市遺跡は由良川沿いの比高10mほどの河岸段丘上に立地する遺跡です。段丘面の続く北と西を幅4.2m、深さ1.2mの堀で区画した段丘先端部の南北180m、東西130mの範囲に、50m四方面度の小区画が4つあったと考えられ、発掘された3つの区画内にはそれぞれ数棟の掘立柱建物が建ち並びます。この遺跡は、上記の3遺跡より遅れて、12世紀後半に成立し、13世紀初頭には廃絶するようです。

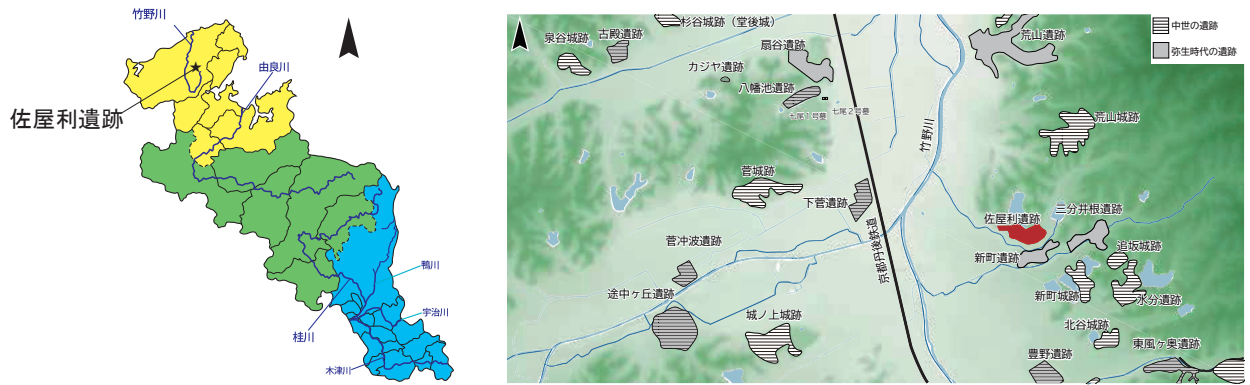
6. 居館遺構の性格

寄進地系荘園(領域型荘園)の盛行する時期に、このような居館遺構が各地に現れることから、これらの居館を営んだのは、有力貴族や寺社などに荘園を寄進して荘官の地位を得た開発領主もしくは荘園領主が現地に派遣した荘官と考えられます。

佐山遺跡は、保元3(1158)年の『石清水八幡宮文書』に極楽寺領の「居屋狭山」と記されていて、居館は、この荘園の荘官が営んだものと考えられます。大内城跡は、附近に存在した六人部荘の荘官の居館と推定されます。六人部荘は、寿永3(1184)年4月6日付「源頼朝下文案(池大納言家領相傳文書案)」(久我家文書)に、「六人部庄 丹波」と記されていて、本所は八条院、領家は池禪尼(藤原宗子)の息子平頼盛です。平氏滅亡により平家没官領となりましたが、源頼朝が池禪尼の恩に報いるために頼盛に返還した荘園のひとつです。上ヶ市遺跡は天田郡前貫首丹波兼定が先祖相伝の私領を松尾大社に寄進して成立した雀部荘(『松尾大社東家文書』寛治5(1091)年)の一面にあたります。

このように、いくつかの居館遺構は、史料に残る荘園との関係が推定できます。佐屋利遺跡周辺には史料に残る荘園は知られていませんが、佐屋利遺跡で見つかった居館遺構は、歴史に残らなかった荘園の存在を示すものとして、大きな意味があります。

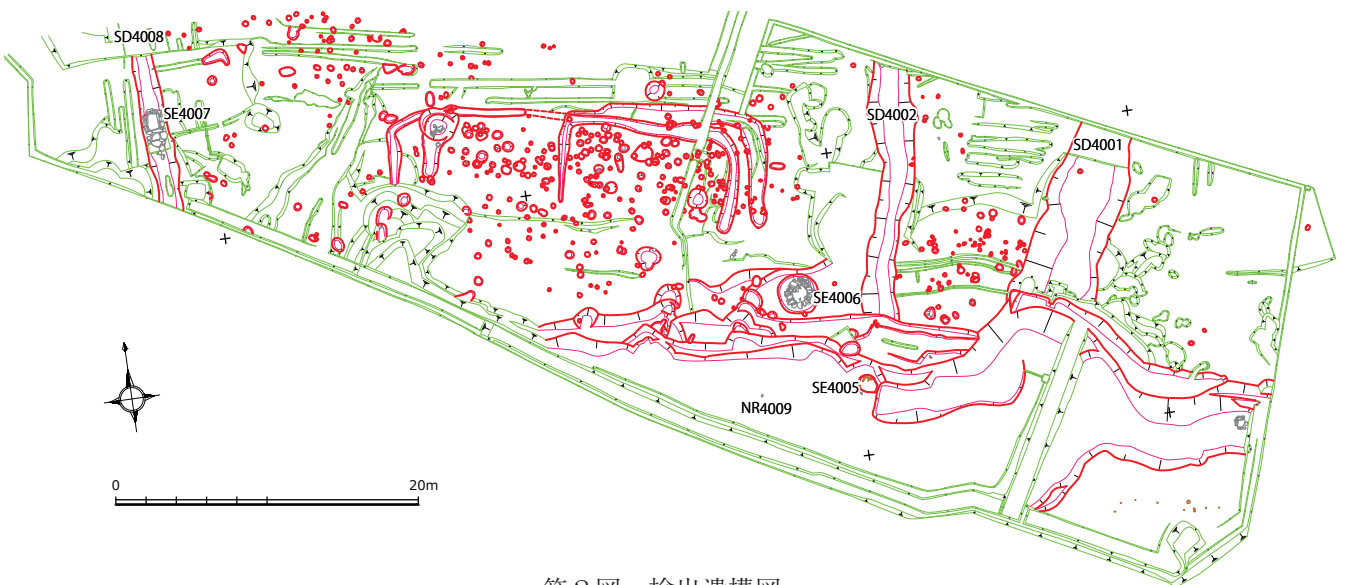
佐屋利遺跡の整理報告は、今後、本格化します。その過程で、各遺構の時期が特定され、遺跡の変遷が明らかとなることで、さらに居館遺構の歴史的な位置付けが鮮明になるものと期待されます。



第1図 佐屋利遺跡の位置と周辺の遺跡



写真1 遺構検出状況(上から)



第2図 検出遺構図



写真2 緡銭出土状況と出土した渡来銭



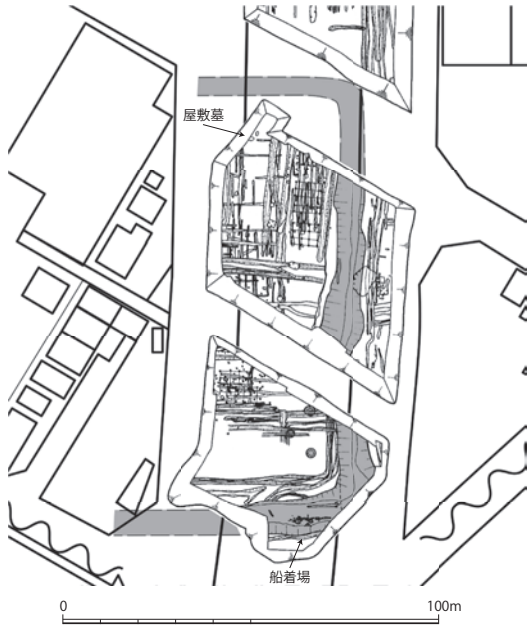
写真3 石組井戸(左)と水溜施設(右)



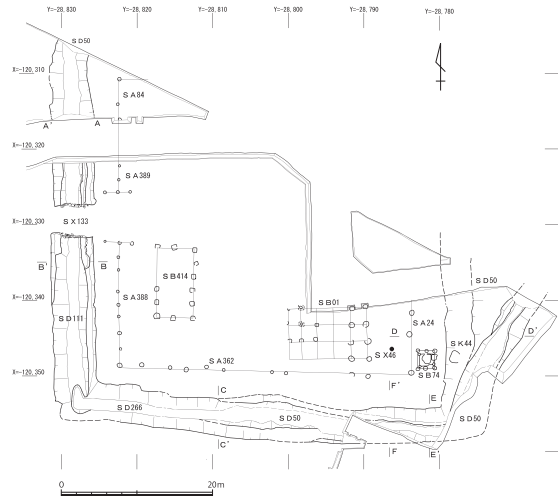
写真4 内面に花文のある白磁皿



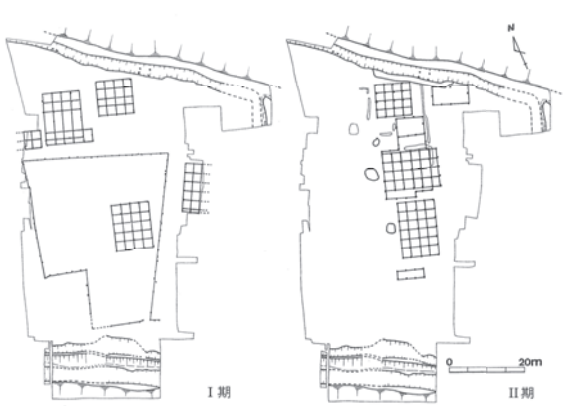
写真5 木簡(左：笹塔婆)



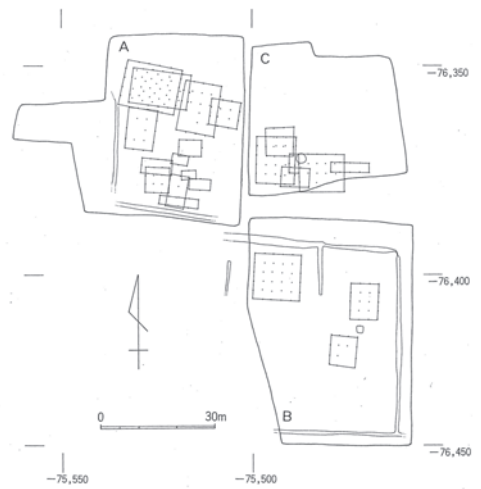
1 久御山町佐山遺跡(1/2,000)



2 下海印寺遺跡(1/1,000)



3 福知山市大内城跡(1/2,000)



4 福知山市上ヶ市遺跡(1/2,000)

第3図 府内でみつけた平安時代末～鎌倉時代の居館

よどみずたれおおしもづちょう 京都市淀水垂大下津町遺跡の発掘調査

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所
松永修平

1. はじめに

淀水垂大下津町遺跡は、京都市伏見区淀水垂町の桂川右岸の河川敷に位置しています。調査地には明治31(1898)年の河川改修工事が行われるまで、水垂集落・大下津集落や與杼神社よどが存在していました。また、この場所は平安時代に成立し、平安京・京都の外港として栄えた「淀津」の推定地にあたります。

今回の調査地は、桂川・宇治川・木津川が合流する地点より上流に約2.5kmの場所に位置しています(第1図)。明治時代以前は、木津川と宇治川はそれぞれ現在の淀城の南側と北側を流れており、調査地付近で三川が合流していました。調査地は、京都盆地の中でも標高が低い場所に位置するこうはいしっち後背湿地で、三川が合流する地点という条件に加えて、おぐらいけ巨椋池の影響も受けていたことから、水害の頻発地になっていました。

調査は、国土交通省の桂川の河道拡幅工事に伴って行われるもので、調査予定範囲は約15,000㎡で、これまでに2回の調査を行い約4,000㎡の調査が終了しました。今回は1次調査・2次調査の調査成果をふまえ、調査で明らかになったことなどを紹介します。

2. 調査成果

1次調査では、みやまえばし宮前橋の南と北側に1か所ずつ調査区を設定し、それぞれ宮前橋の南側を1区、北側を2区としました(第2図)。2区は、当初の想定より遺構面が増加したためにすべての調査を終えることができなかつたので2次調査で引き続いて調査を行いました。2次調査では、3・4・5区を新たに設定し、2区とあわせて4か所の調査を行いました。3区は2区の北側に、4区と5区はそれぞれ宮前橋北側の調査予定範囲の北端と南西隅に設定しました(第2図)。調査では、弥生時代から明治時代までの遺構や遺物を確認しました。時代ごとに主な遺構・遺物を見ていきます。

(1) 弥生時代～古墳時代

この時期の遺構は2・3・5区で検出しました。検出した主な遺構は、弥生時代のものがどこう土坑や溝・おちこみ落込、古墳時代のものがたてあなたてもの竪穴建物や落込です(第3図・写真2)。竪穴建物は全部で8棟、すべて

2区で検出しました。建物からは山城(京都府)産の土器だけでなく、河内(大阪府)産の庄内式甕しょうないしきがめや、東海や近江などの他地域産の土器が出土しました。2区の北半には落込2392があり、これより北側ではこの時期の遺構や遺物は希薄化していきます。2区が集落の北縁部にあたり、集落は南側へ広がる可能性が考えられます。

(2) 飛鳥・奈良時代

この時期の遺構は、2・3・5区で検出しました(第4図)。検出した主な遺構は掘立柱建物、溝などがあります。2区で検出した掘立柱建物2154は、東西3間(約7.2m)、南北2間(約4.2m)の東西棟で北に庇ひさしをもつ建物です。この建物は、庇を有していることから有力者の居館跡や集落の拠点などが想定できます。また、調査地は、長岡京の範囲内に位置していますが、道路側溝などの遺構は確認することができませんでした。

(3) 平安時代

平安時代の遺構は、2・3・4・5区で検出しました(第4・5図)。検出した主な遺構は、平安時代前期から中期の流路、平安時代後期の井戸、溝、土坑などがあります。中でも平安時代前期から中期の流路3400(3区・写真5)、平安時代後期の井戸2225(2区・写真7)や溝3185(3区・写真6)は、特筆すべき遺構です。

流路3400は、3区中央やや南側で検出した流路で、北西から南東方向の傾きで存在しています。埋土からは、土器類とともに、後期難波宮なにわのみやで用いられた重圏文軒丸瓦じゅうけんもん(写真17)や皇朝十二銭の和同開珎わどうかいちん・神功開宝じんぐうかいほう・貞観永宝じょうがんえいほう・長年大宝ちょうねんたいほうも出土しています。

井戸2225は、2区の南端で検出した方形縦板組の井戸で、掘形規模は一辺約4.7m、深さは検出面から約3.6mあります。掘形には、構築材として用いられたのか、完形品を含む丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦が埋められていました(第6図)。このことから、この時期の調査地周辺に通常の集落には存在しない瓦葺かわらぶきの建物が建っていたと考えられます。

溝3185は、3区の東端で検出した南北方向の溝で、検出長約70m、幅約2.5m、深さ約1mあります。溝3185からは、平安時代末期の土師器皿がきや瓦器椀などが1,000点以上出土しており、それらすべてが溝の西肩部から底部に集中していることから、溝の西側から投棄されたと考えられます。また、出土した土器類は、完形や完形に近いものが多いことから、宴会後の一括廃棄などが考えられますが、その詳細な性格については検討中です。

(4) 鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は、1区で流路1017を検出したのみです(第7図)。1区のほぼ全体が流路となっていたと考えられ、その規模については不明です。鎌倉時代の中頃から室町時代前半頃にかけての遺物は、他の時期の遺物と異なりほとんど出土していません。調査地は、この時期になると一旦人の活動範囲ではなくなったようです。

(5) 室町時代～安土桃山時代

この時代の遺構は、全調査区で検出しました(第7図)。検出した主な遺構は、炉、井戸、堀、溝、土坑などがあります。特筆すべき遺構としては、1区の炉1013と鉄滓^{てつさい}が多量に出土した土坑1014や、2区の堀2123・2299・2350、3区の溝3055・3100、4区の溝4030があげられます。

まず、1区の炉1013・土坑1014ですが、土坑1014から出土した鉄滓(写真11)には、炉壁^{ろへき}と鞆羽口^{ふいごはぐち}が一体化したのものなどがあります。炉壁は円筒形^{たてがた}の竪型炉の一部と考えられます。こうした炉壁や鉄滓などの出土から、炉1013は鉄精錬炉^{てつせいれんろ}の可能性が考えられます。精錬とは、不純物の多い金属から純度の高い金属を抽出する工程で、流通の拠点などで行われることもあります。淀津は、中世以降、木材・鉄材の中継拠点としても繁栄したとされており、この鉄精錬炉の存在は、それを裏付けるものと考えられます。

2区の堀2123・2299・2350は、調査区の北部・西端で検出した堀です(写真10)。東西方向の堀2123、南北方向の堀2299・2350はそれぞれ複数回の掘り直しが行われています。それぞれの堀が機能していた時期は、出土遺物から堀2123が15世紀から16世紀後半、堀2299が15世紀代、堀2350が15世紀末から16世紀後半と考えられます。また、堀2350からは永禄10(1567)年と書かれた卒塔婆^{そとば}が、堀2123からは永禄11(1568)年、元亀2(1571)年と書かれた卒塔婆^{げんき}が出土しています(写真19)。堀2123からは卒塔婆の他にも柿経^{こけらきょう}(写真20)や瓦質^{とうろう}の灯籠^{ふろ}、風炉などの寺院や宗教行為と関連する遺物が出土しており、こうしたことからこの堀と寺院との関連を窺うことができます。

3区の溝3055は調査区南端で検出した東西方向の溝(写真9)で、溝3100は、調査区東端で検出した南北方向の溝です。それぞれ検出規模は、溝3055が長さ約20m(2区の溝2646とあわせると約33m)、幅4m以上、深さ約2.4mで、溝3100は長さ約40m、幅約2.2m、深さ約0.75mです。溝3055からは、土器類とともに漆器椀や卒塔婆^{えいしょう}が出土しました。卒塔婆には永正14(1517)年や天文3(1534)年と書かれています。

4区の溝4030は、調査区のほぼ全体を南北方向に貫く溝です(写真8)。この溝の機能した正確な時期は不明ですが、室町時代後期以降に掘削され、江戸時代前期に埋没したことがわかっています。この溝の検出規模は、長さ約35m、幅約7m、深さ約4mです。溝は西半のみが残存しており、底部まで確認できていません。全体を復元した場合、現在の桂川の一部にまでその範囲が及び、元々の溝の幅は約15mあったと考えられます。また、溝の埋土には河川由来の砂が一切混じっておらず、泥土が堆積することから、桂川の本流そのもの、もしくは北側で本流とつながっていたとは考えられません。

(6) 江戸時代～明治時代

この時代の遺構は、全調査区で検出しました(第8図)。検出した主な遺構は、護岸、井戸、地業^{じぎょう}などがあります。

護岸は1・2・3・4区で検出し、江戸時代前期から明治時代にかけて少なくとも2回の造り替えや補修が行われたことがわかりました。江戸時代前期の護岸3473は、江戸時代後期の護岸3200や洪水などによって失われ、3区の北端でわずかに残存していました。江戸時代後期から明治時代の護岸は2・3・4区で確認できました。また、明治時代の護岸3001に伴い水制^{すいせい}3410・3430が構築されています。水制とは、川を流れる水の作用などから河岸や堤防を守るために、水の流れる方向を変えたり、水の勢いを弱くしたりすることを目的として河岸に設置される構造物です。

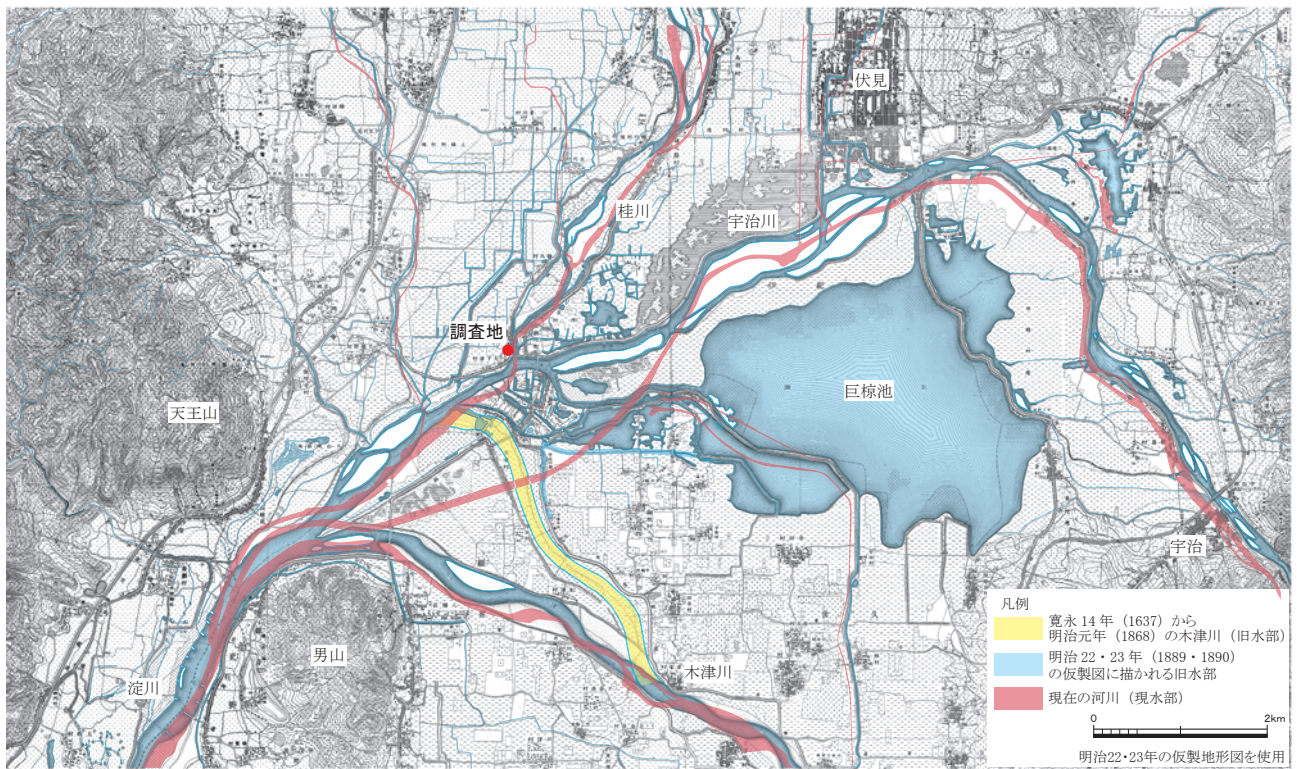
4区でも護岸に伴う水制4035を検出しました(写真12)。水制4035は、溝4030が一定埋没してから構築されたもので、水制の核となる石積みの下部に胴木を用いるなど、非常に丁寧な構築を行っていることがわかりました。また胴木に用いられている木材は、船材を転用したもので、最大で長さが約5.4mあります。

5区では地業5002・5003を検出しました(写真14)。地業は幅約1m、深さ約0.3mで、5区の場所は、與杼神社旧境内に推定されており、これらの地業は、與杼神社と関連する施設の可能性が考えられます。また、江戸時代の造成土中から桔梗紋^{ききょう}を表す飾金具が出土しました(写真21)。

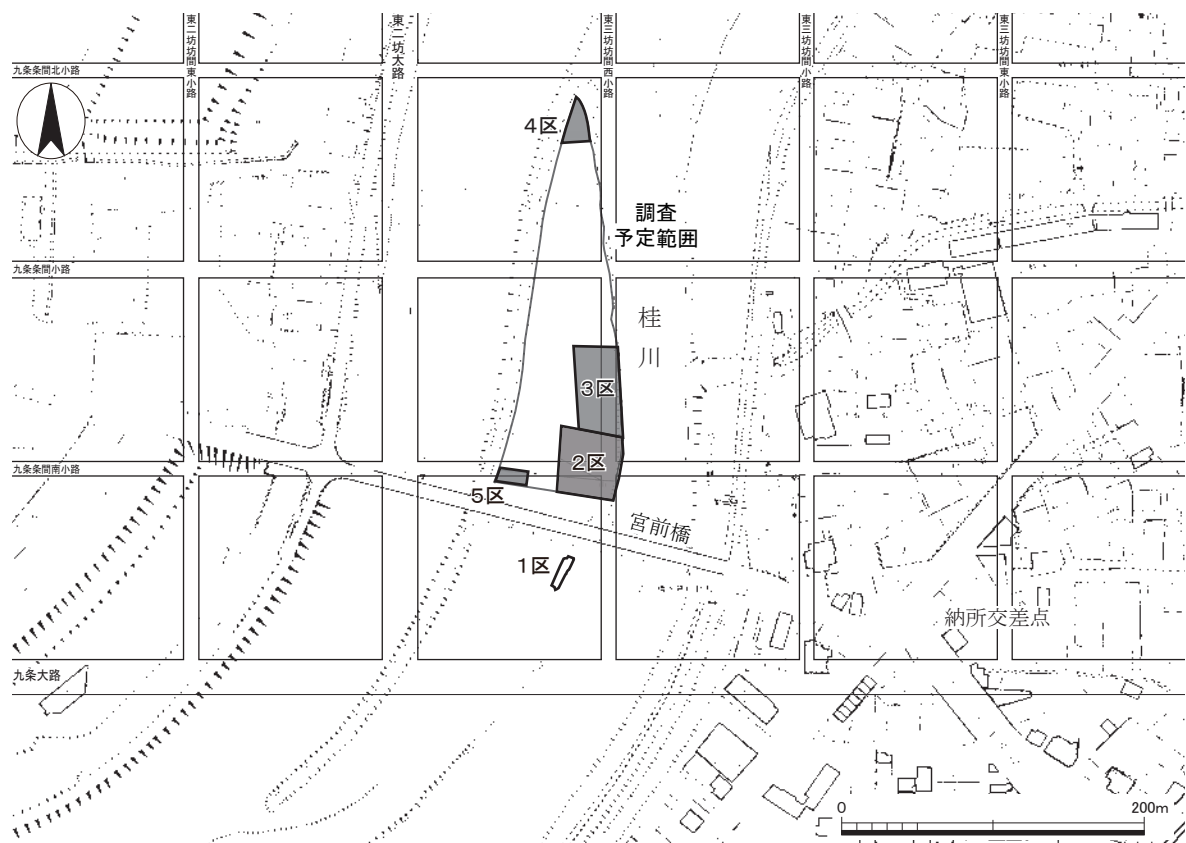
3. おわりに

1次調査と2次調査の調査成果を見てきました。調査を行うまで、調査地が河川敷ということもあり、遺構の残存状況はよくないだろうと想定していましたが、実際に調査を行ったところ、弥生時代から明治時代まで、一時的に途絶えはするものの人々が長い間この場所で生活をし続けていたということが明らかになりました。文献資料では、平安時代前期には淀で洪水によって家が流されるなどの被害があったことが記事になっていますが、水害が頻発するこの場所に人々が住み続けたのは、やはり、桂川・宇治川・木津川が合流する交通の要衝^{ようしゅう}として、この場所が重要だったからでしょう。

今回紹介した遺構や遺物は、これまでの調査で確認したものの一部に過ぎません。また、2次調査の調査成果については、検討中のものも多く、詳細には紹介することができていません。とはいえ、今回紹介した遺構や遺物に限ってみてもこの遺跡の特異な点がわかるかと思えます。各調査区で検出した遺構は、様々な時期のものがありますが、そのいずれも規模の巨大さや出土遺物の質・量などが通常の集落遺跡でみられるようなものではありません。こうした遺構の検出状況や遺物の出土状況を考えると、調査地と「淀津」^{よどつ}との関連は非常に高いと考えられます。しかしながら、船着き場や護岸などの港と直接関係する遺構や、荷札木簡などの遺物はこれまで確認されていません。そうした遺構や遺物が見つかるのかは、今後の調査を待ちたいと思います。



第1図 調査地位置図と江戸時代・明治時代・現代の河川



第2図 澁水垂大下津町遺跡 調査区配置図(1:5,000)



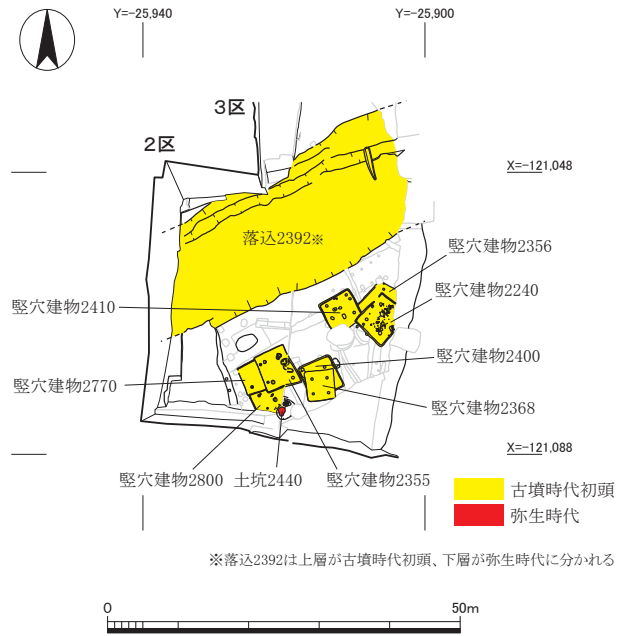
写真1 調査地遠景(南西から)



写真2 2区 土坑2440(南から)
弥生時代



写真3 2区東半(1次調査) 竪穴建物群(北西から)
古墳時代初頭



第3図 2・3区 弥生時代～古墳時代初頭の主な遺構(1:1,000)



写真4 2区 掘立柱建物2154(南西から)
飛鳥時代

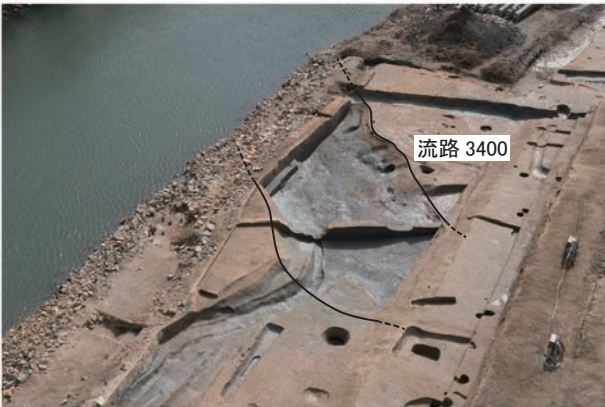


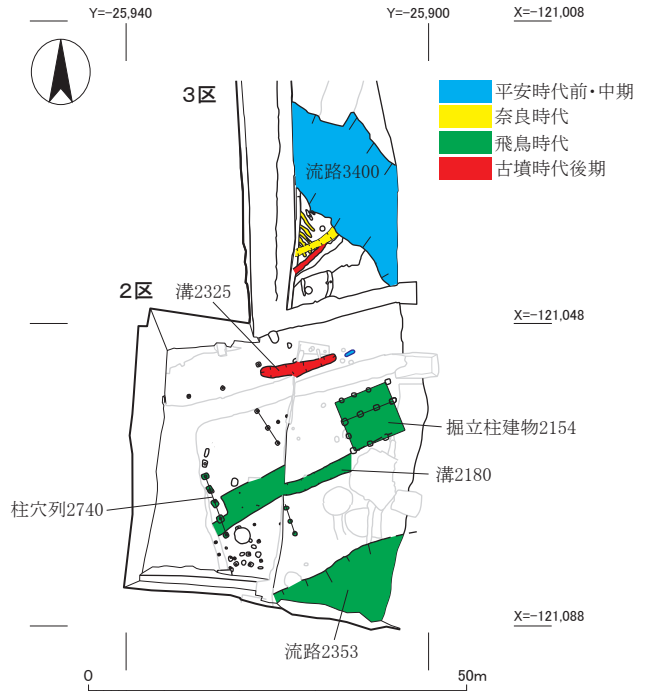
写真5 3区 流路3400(北西から)
平安時代前期～中期



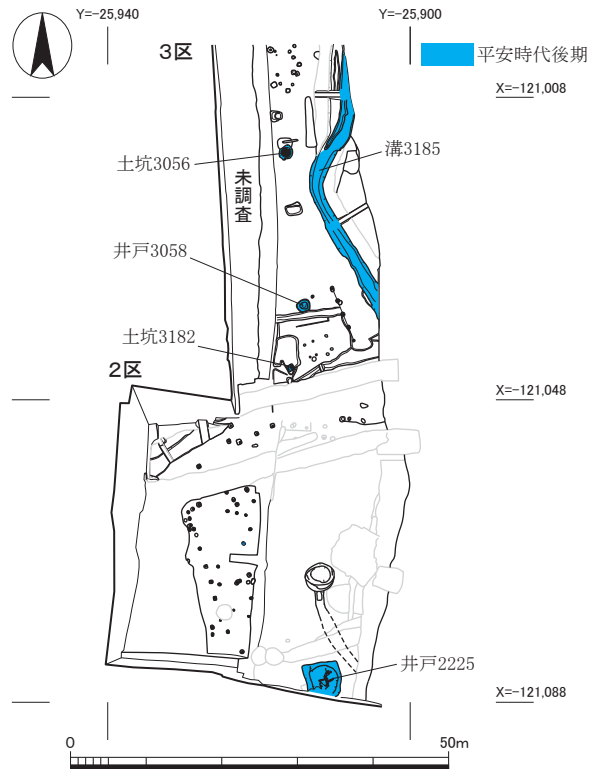
写真6 3区 溝3185土器出土状況(北西から)
平安時代後期



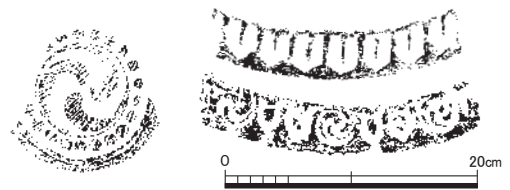
写真7 2区 井戸2225(北東から) 平安時代後期



第4図 2・3区 古墳時代後期～平安時代前・中期の主な遺構
(1:1,000)



第5図 2・3区 平安時代後期の主な遺構(1:1,000)



第6図 井戸2225から出土した瓦(1:6)



写真8 4区 溝4030(北から)
室町時代後期～江戸時代前期

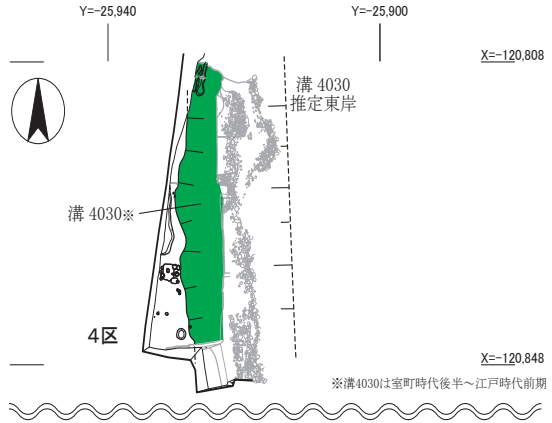


写真9 2・3区 堀2123と溝2646・3055(南西から)
室町時代後期～安土桃山時代

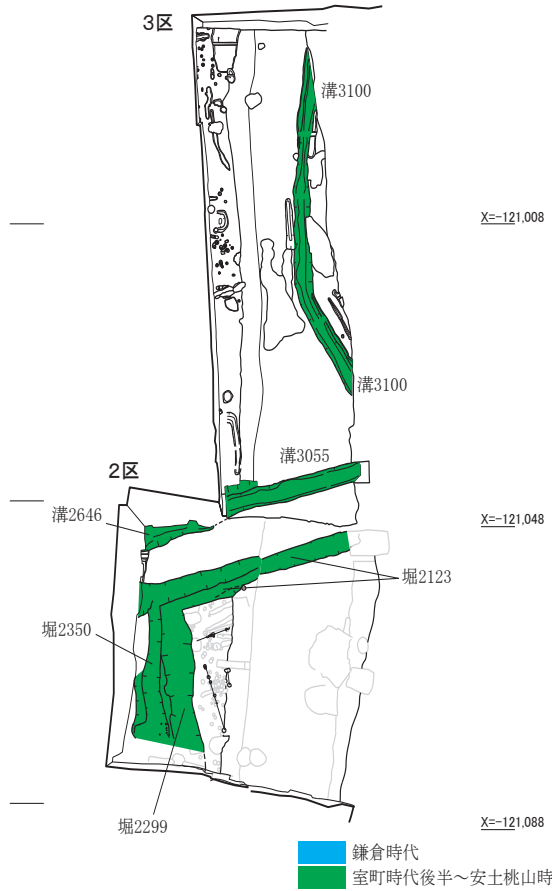
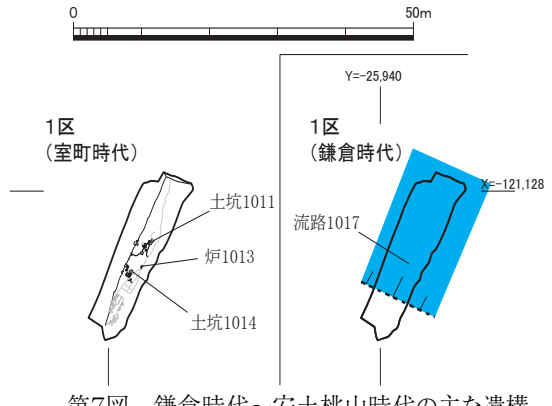


写真10 2区 堀2123・2299・2350(北東から)
室町時代後期～安土桃山時代



写真11 1区 土坑1014鉄滓出土状況(北から)
室町時代



第7図 鎌倉時代～安土桃山時代の主な遺構
(1:1,000)



写真12 4区 水制4035(南東から)
江戸時代前期

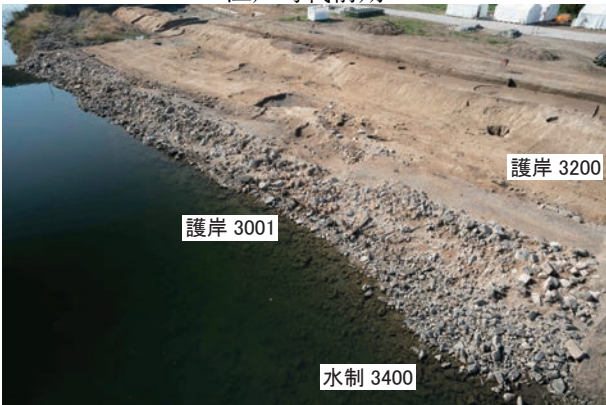


写真13 3区 護岸3001・3200(北東から)
江戸時代後期～明治時代

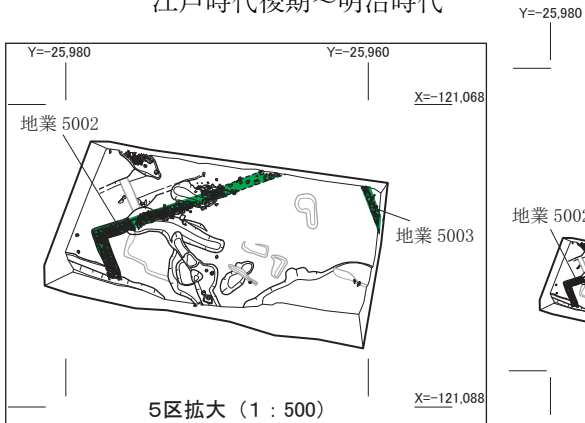
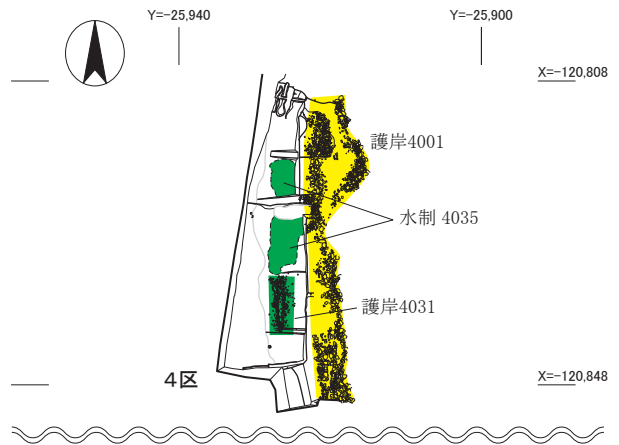


写真14 5区 地業5002・5003(南西から)
江戸時代後期～明治時代



第8図 江戸時代から明治時代の主な遺構
(1:1,000)



写真15 竪穴建物2240土器出土状況(北西から)

山城産



河内産



写真16 竪穴建物2240から出土した土器



写真17 重圏文軒丸瓦の出土状況(流路3400から)



写真18 平安時代後期の瓦の出土状況(土坑3056)



写真19 堀2123出土の卒塔婆



写真20 堀2123出土の柿経



写真21 飾金具出土状況(5区江戸時代の整地層から)

しばやま 城陽市芝山古墳群の発掘調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
菅 博 絵

1. 芝山古墳群と古墳時代の周辺の遺跡(第1図)

芝山古墳群は、城陽市東部のJR奈良線長池^{ながいけ}駅から北へ約200mの西へ延びる丘陵(芝山丘陵)に立地します。芝山古墳群と同一丘陵の末端には庄内期の長池墳丘墓(方形墳丘墓・25m)や西側高位段丘面上には古墳時代前期末期の梅の子塚1号墳(前方後円墳・87m)、同2号墳(前方後円墳・65m)が所在し、北側には古墳時代中期の宮ノ平古墳群が所在します。南側には森山遺跡が所在し、古墳時代前期の集落と豪族居館と考えられる方形周溝状遺構のほか後期の集落も検出されています。丘陵下の沖積平野に位置する下水主遺跡では古墳時代前期と後期の集落遺跡が検出されています。北へ約2kmの大谷川の扇状地には久津川^{くつがわ}車塚古墳をはじめとする中期の大型古墳が所在します。

2. 府内最大級の古墳群久津川古墳群(第2図)

久津川古墳群は、宇治市南部から城陽市にかけて広がる京都府内最大級の古墳群で、宇治丘陵から派生する丘陵や木津川へ流れる3つの河川が形成した扇状地に100基以上の古墳が築造されています(第1図)。これらの河川を中心とした地域的まとまりから、^{ひろの}広野・^{くせ}久世・^{とよの}富野の3つの支群に分かれ(小泉2021)、芝山古墳群は富野支群を構成する古墳群です。久津川古墳群の特徴として、立地のほかに、前期から後期にかけて継続的に古墳が築造されること、竪穴系の埋葬施設を持つことがあげられます。

古墳時代前期 久津川古墳群は芝ヶ原古墳(前方後方形墳丘墓・21m)や長池墳丘墓のような弥生時代の伝統的な墓制を引き継ぐ方墳や前方後方墳を始まりとします。久世支群では伝統的墓制を持つ西山1号墳(前方後方墳・80m)・2号墳(方墳・25m)が築造されます。久世支群では前期後半になると埴輪や葺石を持たずヤマト政権とはかかわりが薄い「首長連合」ともいえる盟主墳が複数造られます(小泉2021)が、広野支群や富野支群では一本松古墳や梅の子塚1号墳などヤマト政権とかかわりを持つ古墳が築造されます。

古墳時代中期 中期前半になると久世支群に久津川車塚古墳を代表とする大型古墳が築造され、その他の支群で前方後円墳や中型古墳が築造されなくなります。これは大型古墳を頂点とした地

域支配への影響と考えられます(第3図)。中期後半になると久世支群では赤塚古墳(円墳・32m)を最後に有力首長墓が築造されなくなります。一方、富野支群では宮ノ平古墳群が築造され、大型古墳を頂点とした支配体制が崩壊していきます。

古墳時代後期 後期になると、広野支群・久世支群・富野支群で小型の前方後円墳が築造されます。これまでの支配体制が崩壊し、ヤマト政権による直接的な地域支配が進み、地域の有力首長が復活したためと考えられます(第3図)。後期後半の久津川古墳群では富野支群の芝山古墳群を除いて古墳の築造が停止します。城陽市^{あおだに}青谷地域に位置する^{かぶとやま}冑山1号墳(前方後円墳・30m)や木津川市^{かみこまてんじくどう}上狛天竺堂1号墳(前方後円墳・27m)は南山城で最も早く横穴式石室を導入した古墳です。これらの地域には前身となる首長墓がなく、新たに^{たいとう}台頭した勢力によって新技術の古墳が造られたと考えられます。

古墳時代終末期 後期後半まで古墳を築造していた芝山古墳群でも古墳づくりが^{しゅうえん}終焉をむかえます。久世支群の^{かみおおたに}上大谷古墳群ではこれまでの木棺直葬などの竪穴系の埋葬施設から横穴式石室を持つ古墳群が築造されます。前段階の古墳との間に断絶があること、横穴式石室を持つことから、新興勢力による古墳群であることが指摘されています。扇状地で古墳が築造される一方、人口増加に伴いこれまで墓域として利用していた丘陵が集落として利用されるようになります(小泉ほか1999・小泉2021)。

3. 芝山古墳群の調査成果

芝山古墳群は、昭和52(1977)年に城陽市教育委員会が実施した発掘調査で梅の子塚1号墳東側(Ⅱ支群)から削平された方墳が検出されたことによりその存在が明らかとなりました。その後の発掘調査で芝山古墳群は、古墳時代前期から後期にかけて営まれた37基の小型方墳や円墳によって構成される古墳群であることがわかりました。

①古墳の支群(第4図)

芝山古墳群は古墳の立地から6つの支群に分けることができます。

I支群 梅の子塚1号墳より20m下った芝山遺跡の北側段丘面に位置する21基の方墳と中・小型円墳で構成される支群です。埋葬施設や周溝内の出土遺物から古墳時代中期末から後期に築造されたと考えられます。

Ⅱ支群 梅の子塚1号墳の東側に位置する4基の小型方墳から構成される支群です。周溝内の出土遺物から古墳時代中期後半に築造されたと考えられます。

Ⅲ支群 梅の子塚2号墳南側、高位段丘面へ至る丘陵裾部に位置する3基の小型方墳で構成される支群です。埋葬施設や周溝内の出土遺物から古墳時代中期前半から中頃に築造されたと考えられます。

Ⅳ支群 梅の子塚2号墳南東に延びる丘陵先端に位置する5基の小型方墳から構成される支群です。埋葬施設や周溝内の出土遺物から古墳時代前期後半から中期初頭に築造されたと考えられます。

Ⅴ支群 梅の子塚2号墳南東に位置する南西に延びる尾根上の4基の小型円墳から構成される支群です。埋葬施設や周溝内の出土遺物から古墳時代後期に築造されたと考えられます。

Ⅵ支群 Ⅰ支群が位置する丘陵平坦面の南側、南西に向かって延びる谷を挟んだ平坦面上に位置する小型円墳からなる支群です。埋葬施設の出土遺物から古墳時代後期後半に築造されたと考えられます。

②古墳の変遷(第2図)

各支群には時期的なまとまりがみられ、Ⅳ→Ⅲ→Ⅱ→Ⅰ→Ⅴ・Ⅵの順で造られたことが分かりました。

古墳時代前期～中期初頭

Ⅳ-3号墳の周溝から出土した壺形埴輪は、宇治市一本松古墳と同時期のものであることがわかり、これまで梅の子塚1号墳が富野支群の最初の古墳と考えられていましたが、富野支群においても伝統的墓制を引き継ぐ方墳が古墳群の契機であることがわかりました。

その後、丘陵西側斜面に梅の子塚1・2号墳が築造され、丘陵先端部には小型方墳が築造されます。埋葬施設は棺の小口に粘土塊を置く、棺身と蓋の境に粘土を張り付けた割竹形木棺わりたけがたを設置します。Ⅳ-2号墳は鏡や玉製品など豊かな副葬品が出土しています。周辺からは対置式神獸鏡たいちしきしんじゅうきょう(写真1)や石釧いしくしろも出土しており、周囲に別の古墳があった可能性があります。

古墳時代中期

Ⅲ-1号墳の周溝からは形象埴輪けいしょうはにわや円筒埴輪が、Ⅲ-2号墳からは蛇行剣だこうけんが2振り出土しました。近畿地方において蛇行剣は盟主墳からは出土せず、小型方墳や大型円墳から出土する傾向にあり、Ⅲ-2号墳も築造時期から考えると小型の方墳であった可能性が高いです。1号墳は埋葬施設が残っていませんでしたが、2・3号墳は組合せ式木棺が設置されていたと考えられます。

Ⅲ群の古墳づくりが収束していくころ、墓域が梅の子塚1号墳の東側へ移動します。埋葬施設は残存しておらず詳細は不明ですが、周溝の底から須恵器が出土しており、この時期に芝山古墳群では須恵器が副葬されるようになったと考えられます。

古墳時代中期末～後期

梅の子塚古墳から20m下に広がる平坦面に墓域が移動します。中期末から後期前半までは小型方墳が築造されますが、後期前半になると小型方墳から中・小型円墳へ墳形が変化していきます。久世支群の上大谷古墳群の墳形の変化の時期とも一致し、富野支群でもヤマト政権の地域支配が進んだ影響と考えられます。後半になると南西にのびる丘陵上にも円墳が築造され、立地の違い

から少なくとも2つの集団が丘陵を墓域として利用したと考えられます。

古墳時代終末期

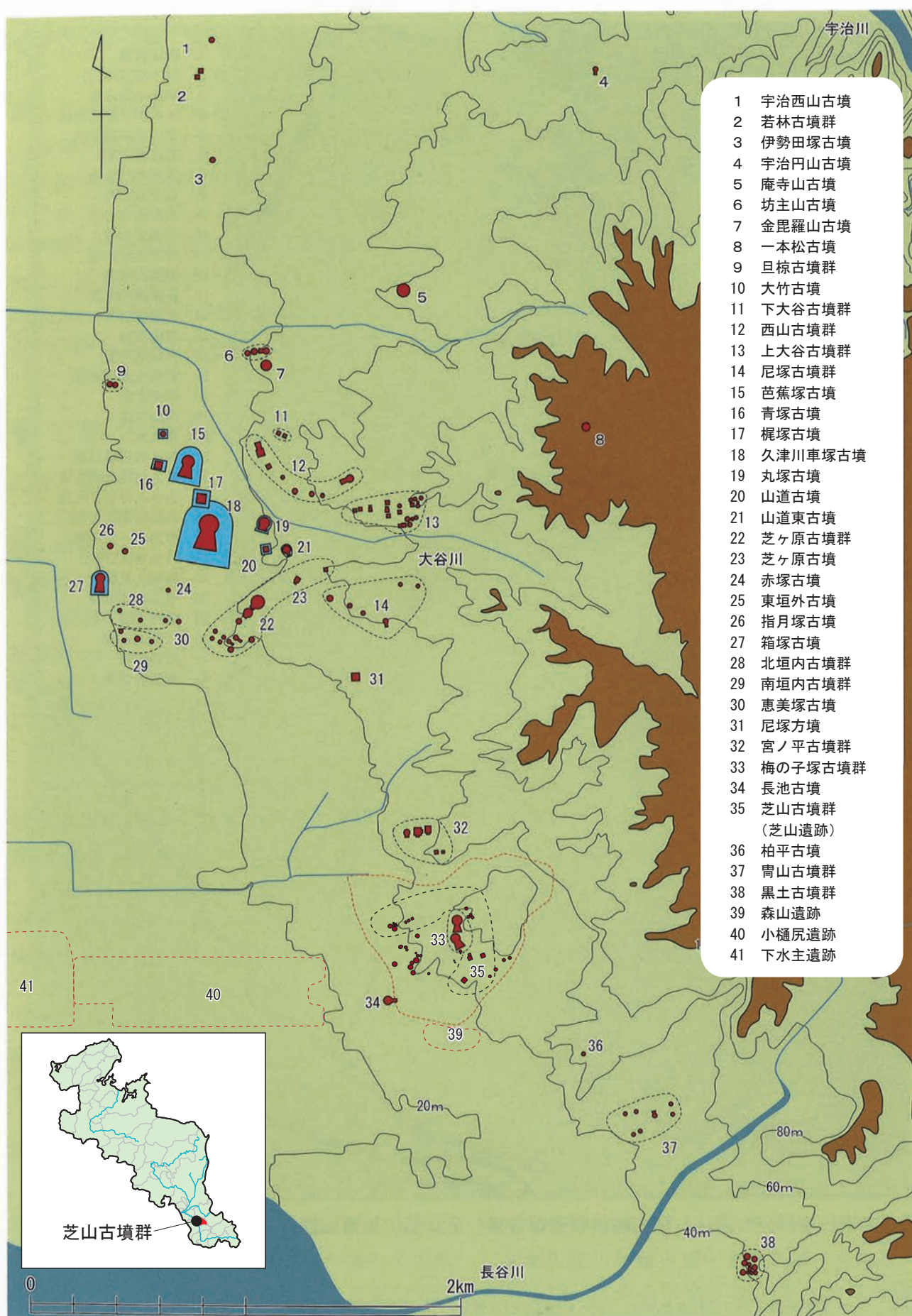
古墳の築造が終了すると、I支群がある平坦面が集落として利用されるようになります。後期後半に造られた円墳はお墓としての認識があったようで、集落と墓域を仕切る境界溝が掘られません(第5図)。一方、古く造られた方墳は壊されて集落が造られます。この時に古墳などの土地起伏に対して、集落を作るにあたり平坦化する造成が行われたと考えられます。久世支群では、人口増加に伴い古墳時代後期後半になると丘陵上の開発が進み、集落が拡大していきます(小泉ほか1999)。芝山古墳群の集落化もこの一連のものと考えられます。その後、芝山古墳群が造られた丘陵は平安時代まで集落として利用されていきます。

4. まとめ

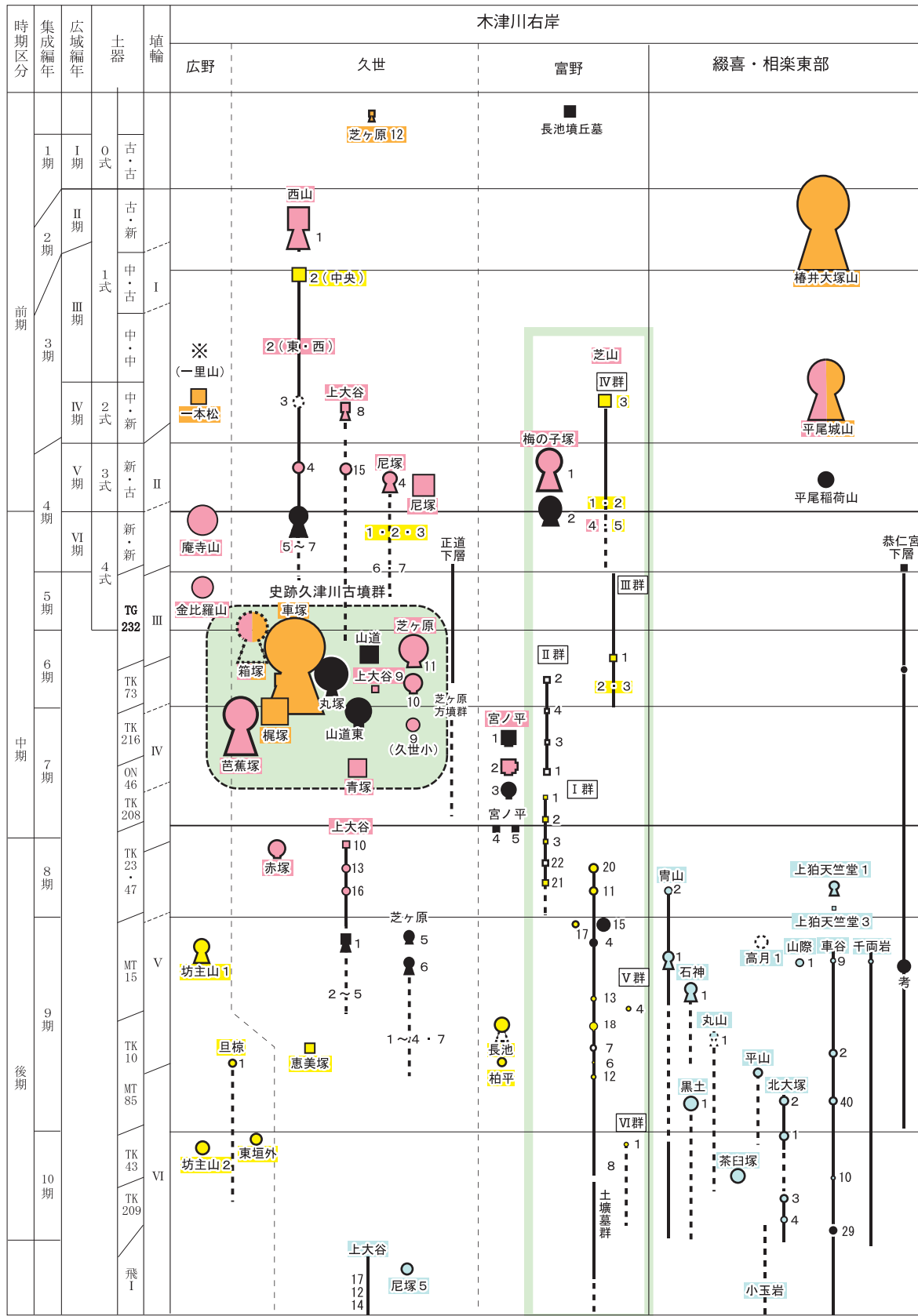
芝山古墳群は芝山丘陵という狭い範囲のなかで古墳時代前期後半から後期後半まで継続して古墳が造られる稀有な古墳群です。そのため古墳の変化や丘陵の利用の変化を知ることができます。墓制の変化は古墳時代の社会情勢を反映しており、古墳時代を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

<参考文献>

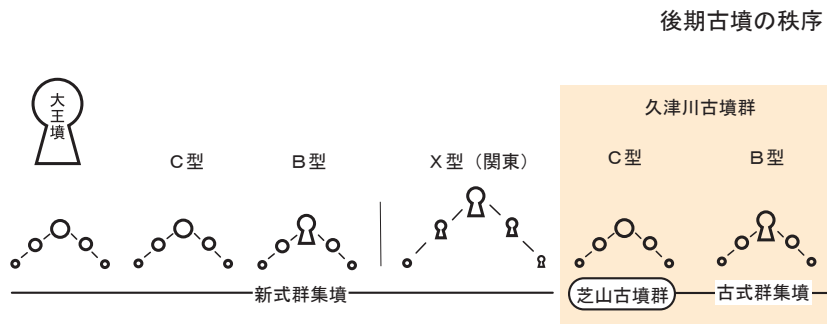
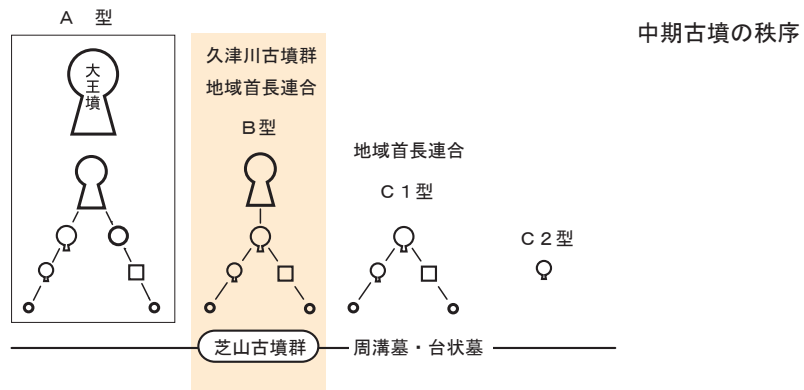
- 小池 寛2003「城陽市芝山遺跡の土地利用について」『京都府埋蔵文化財情報』第89号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小池 寛2022「城陽市芝山遺跡からみた久津川古墳群」『京都府埋蔵文化財情報』第142号(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小泉裕司ほか1999『城陽市史』第3巻 城陽市役所
- 松尾史子・奥村清一郎編2016『山城の二大古墳群－乙訓古墳群と久津川古墳群－』展示図録39 京都府立山城郷土資料館
- 小泉裕司2021「久津川古墳群の動向」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群－南山城の古墳時代とヤマト王権－』季刊考古学・別冊34 雄山閣
- 桐井理揮2022「7 古墳編年における綴喜古墳群の位置づけと他地域との比較」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会
- 菅 博絵ほか2023『京都府遺跡調査報告集』第189集(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 前坂尚志1994「蛇行剣小考」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 和田晴吾2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館



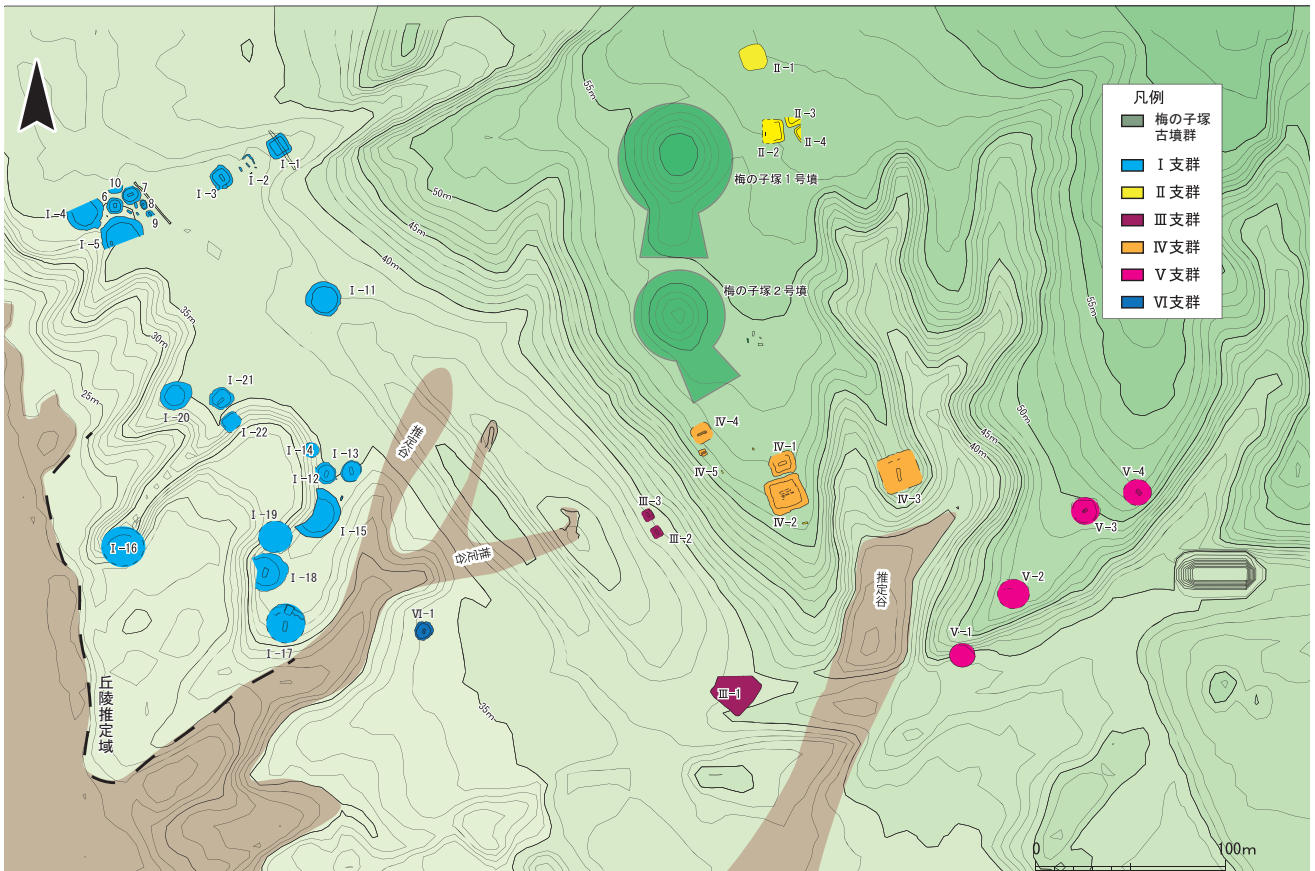
第1図 芝山遺跡と周囲の遺跡(松尾史子・奥村清一郎編2016を一部加筆)



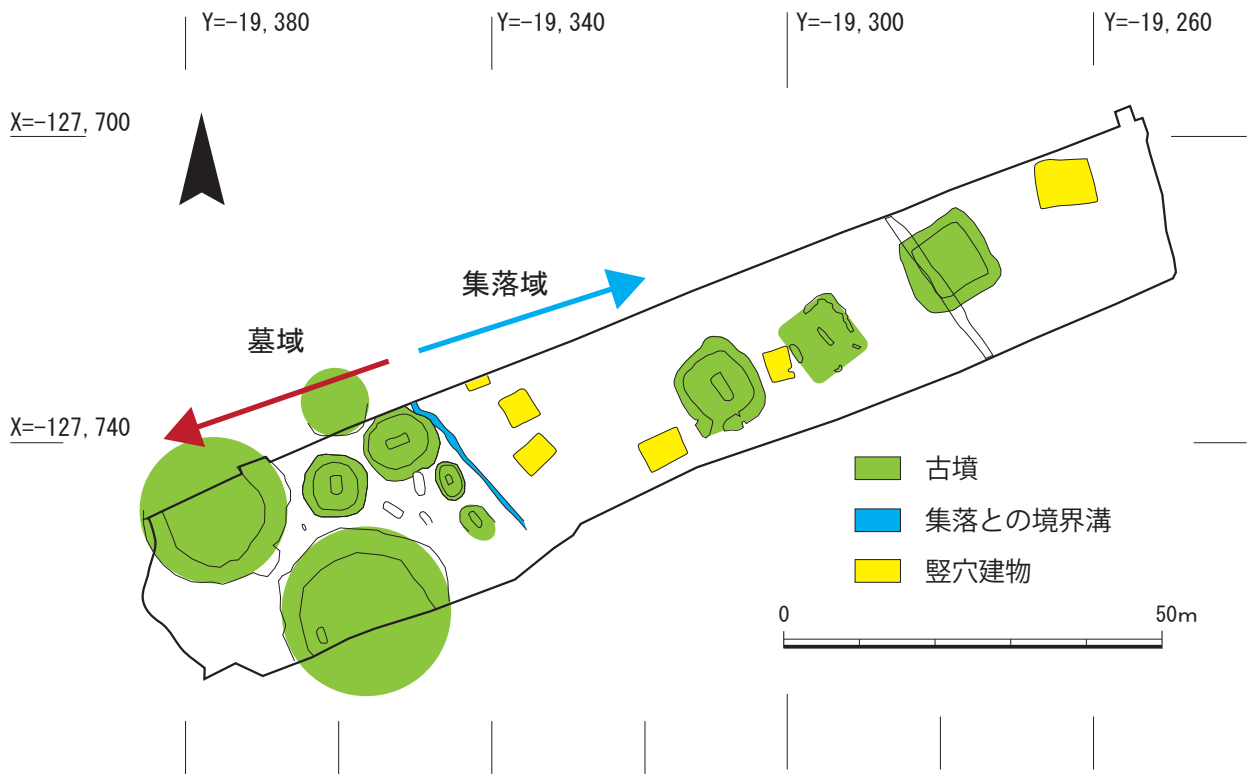
第2図 木津川右岸域の古墳編年図(桐井2022を基に作成)



第3図 古墳時代中期・後期の地域支配概念図(和田2018に一部加筆)



第4図 芝山古墳群支郡分布図(1/4,000)



第5図 墓域と集落の境界溝

竪穴系…墳丘の頂上に穴を掘り槨をつくる。
 または棺を入れる。単独葬送。
 (竪穴式石槨・粘土槨・棺をそのまま埋葬)



横穴系…墳丘・丘陵斜面に石室へ入る
 横穴(羨道)を持つ。追葬可能。
 (横穴式石室・横穴)



棺 …遺体を入れる容器
 石槨…棺を納め、保護する容器
 室 …広い空間とそれに至る通路を持つ

第6図 埋葬施設の違い(模式図)



写真1 対置式神獸鏡



第 152 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 5 年 8 月 19 日（土）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189

